

中嶋勝彦のLIDET UWF世界王座へ挑戦する渡辺壮馬にインタビュー

# 腰振り男が口にした 「命削ってやっています」

第3代LIDET UWF世界王者として無敵の防衛ロードを突き進む中嶋勝彦は、2・11後楽園ホールで青木真也を下しV7を達成したあと、相手がいないからベルトを封印すると発言。それに抵抗するべく挑戦に名乗りをあげた中から3・8新木場1stRING「LIDET UWF Ver.8」でタイトルマッチが組まれたのは、BLACK GENERATION INTERNATIONALの渡辺壮馬だった。G PROWRESTLINGでは腰をクネらせ軽いキャラクターで味を出す壮馬が、ここに来てLIDET UWFに対するこだわりを見せたのはどのような思いだったのか。5年前、WRESTLE-1在籍時に取材した時はあまり喋らないタイプだった男が、UWFへの熱量を饒舌なまでに語った。

(聞き手・鈴木健.txt)

## 自分の中にあるLIDET UWFへの 葛藤を突いてきた中嶋の言葉

——中嶋勝彦選手の「LIDET UWF王座を封印する」という発言を受けて伊藤貴則、井土徹也、そして渡辺壮馬選手の3人が挑戦の名乗りをあげましたが、その中で壮馬選手がチャレンジャーとして選ばれました。

**渡辺** ほかの2人は中嶋選手とLIDET UWFを懸けて敗れていますけど、僕はまだ(LIDET UWFを懸けては)やっていないんで、順番的にもそうなるよなっていう感じです。それを抜きにしても、もう俺しかないだろ!って思うし。

——ただ、ここ最近ではBLACK GENERATION INTERNATIONALとしての活動に専念していたこともあり、LIDET UWFに関しては試合にこそ出場してもこれといったアピールはしてこなかったのが、唐突感があったのも確かです。

**渡辺** 言われてみればそうですけど、中嶋選手による“封印”というワードによって突き動かされたんです。あのベルトは、初代王者を決めるトーナメントをみんなで作った上で始まったわけじゃないですか。あの時、闘った者たちでしか味わえなかったLIDET UWFならではの殺伐感、緊張感、恐怖心というものを中嶋選手は情報レベルでしか知らないと思うんですよ。それを味わっていない人にベルトを獲られたまま封印というのは、そこに出たほかの選手たちに対しても失礼だと思うし、特に僕は



1回戦で佐藤光留選手とやって負けて本当に悔しい思いをした。仮に、本当にLIDET UWFのタイトルを封印するのであれば、あのトーナメントで闘った人間…これを始めた人間がするべきだと思うし、その一人である自分の手で封印したいって思ったんです。

——では、中嶋選手が封印を口にしなかったら名乗りをあげていなかった？

**渡辺** だと思います。僕、前回のLIDET UWF(12・6新木場1stRING)の時も「今の時代にUWFというものが必要なか必要じゃないのかわからない」って発言しているんですよ。それはおそらく、ファンも思っていることだと思って。ハッキリ言ってしまおうと中途半端だということはやっていて感じていたんです。だけど、だからこそそれを変えたいと思う自分もいる。そういうどこか曖昧な位置づけの現状だからこそ、封印というワードが引っかかったのかもしれないです。

——自分の中にあった葛藤を突いてきたような？

**渡辺** ああ、まさにそうですね。G PROWRESTLINGの方が、前回の後樂園が終わって丸々1ヵ月ないじゃないですか。せっかく年末から後樂園までの間に発生した流れに関心を持ってもらえてきたのに、そこへポツンと別の興行が入る。それなら、その一枠をG PROWRESTLINGに回してくれよってという思いもある。LIDET UWFを続けてきた自分でも、そう思うってしまうのが今のLIDET UWF興行の受け取られ方なんじゃないですか。そんな現状に対し、封印という言葉が刺されたことで気持ちが揺さぶられたところは、確かにあります。

——今、言われたようにLIDET UWFルールでの試合は続けてきたわけじゃないですか。その分の思い入れも持たれているとは思いますが。

**渡辺** それはあります！UWFスタイルをやったことで僕の中にあるプロレスの価値観がすごく変わりました。だから、やってよかったと本心から言えます。ただ、僕の中ではLIDET UWFとG PROWRESTLINGはまったくの別モノとらえているので、そこで果たして必要かどうか考えてしまうんです。で、その答えは僕の中でも出ていない。自分の手で封印するという気持ちも本心なんです。その一方で…LIDET UWFって、ハードヒットとの対抗戦から始まったじゃないですか。その時の殺伐感はお客さんにも伝わっていたと思うし、今だから話せますけど試合前の恐怖感や、セコンドについて血まみれになる田中稔さんを見て「うわー…マジかよ」って思ったこともあったんです。だから、続けるとしたらそういうものを取り戻したいし、取り戻せるならば続けたい。でも、中途半端なままなら、きっぱりやめるのもUWFに対してのケジメというか。

——ということは、自分の手で中途半端な位置づけからすくいあげたいという意味を抱いていると。



**渡辺** ああ、そうですね。

——ただ、中嶋選手の方からは奇しくも3人の中で一番中途半端なのが渡辺壮馬という辛らつな言葉が出ています。

**渡辺** (食い気味に)僕から見たら中嶋勝彦の方が中途半端です。前回のLIDET UWFの時(中嶋&愛鷹亮vsケンドー・カシン&青木真也)もいきなり場外乱闘になったじゃないですか。

——カシン選手が中嶋選手に襲いかかり、そうになりました。

**渡辺** そんなのあるか！ですよ。僕はあの頃のUWFは見えていなかったの、あくまでもGLEATに入ってから知った身ですけど、そこから数えてもそんなものはなかった。それは、そういうものじゃないからです。確かに防衛回数は重ねてきていますが、それって勝敗とは別次元のLIDET UWFに向き合う姿勢の問題じゃないですか。あのベルトを巻いて、このスタイルの象徴であるべき人間がUWFからかけ離れたことをやっている。それを中途半端と言わずしてなんと言うんですか。

——自身は中途半端だと認識していないんですね。



**渡辺** もちろんですよ。言葉にすると軽くなってしまうので、本当は言いたくないけど命を削ってUWFをやっています。あのトーナメントで、それほどの覚悟でやらなければ続けられないってわかったんで。

——B.G.I.としては腰をクネらせて弾けている壮馬選手から、命を削るという言葉が出たのは意外というか。

**渡辺** 中嶋勝彦はそこを拾って中途半端と言っているんですよ。

——そうですね。「言葉が響かない。腰を振ってないで頭を使え」と。

**渡辺** そこは先ほども言った通りG PROWRESTLINGとLIDET UWFは違う種目ぐらいに思っているんで、B.G.I.の渡辺壮馬でいくつもりはないですから。言われなくてもUWFの渡辺壮馬としてあなたの前に立つから勘違いしないでほしい。腰を振るのも、LIDET UWFのリングでやるのは僕の中ではあり得ない。反対に、蹴りとか打撃はG PROWRESTLINGでは出さないようにしています。井土や伊藤はそのあたりで分けることなくキックを出すじゃないですか。でも僕はそこを明確に分けています。

——思わず出してしまうことは？

**渡辺** ないです。

——あのう、そもそもなぜ腰をクネらせ始めたんですか。

**渡辺** 名古屋だったかな、CIMAさんと組んだ時があったんですけど、その頃ってちょうどCIMAさんがマグナム(TOKYO)さんと久しぶりに再会した時で、試合中に腰をクネらせたんですよ。

——要はマグナムオマージュ。

**渡辺** それを見て、ちょっと僕もやってみようかと思ってクネらせたなら、これはCIMAさんより俺の方がうまいんじゃないかって。

——自分の方がうまいという根拠は？

**渡辺** 僕の方がなめらかだと思ったんです。これはもう、俺のものだと。もちろんそれまで試合以外でも腰を振ることなんてやったことがなかったんですけど、やった瞬間に「俺にはこれだ!」と思いました。

——ようやくキャッチーなものに出逢えたぞと。リック・ルードやレイパロマじゃなかったんですね。

**渡辺** レイパロマでもなく、マグナムさんのマネをしているCIMAさんのマネという。それでようやく、自分のカラーが見えたなという手応えがありました。あとは、LIDET UWFと両立するにあたって真逆じゃないですか。それもいいなって思ったんです。

# 封印か、継続か—— 答えは自分の中でも当日まで出ない

——中嶋選手とはG PROWRESTLINGルールながら過去に1度、シングルマッチで対戦しています(2025年5月17日、横浜ラジアントホール。G-CLASS 2025ブロック準決勝で敗れる)。

**渡辺** その時点で強いのはわかっていましたからね。僕がWRESTLE-1所属の時に外敵としてやってきて、ベルト(WRESTLE-1チャンピオンシップ)をあっという間に獲ってしまった。あの時に強さを感じていたし、GLEATに来てからもGLEATの色には染まらず中嶋勝彦であり続けている。本当に、あの頃の光景をもう一度見ているような感覚なんですよ。今回も外敵としてGLEATのベルトを持っているわけじゃないですか。あの時は、最終的にカズ(ハヤシ)さんがベルトを獲り返して…直後にWRESTLE-1は活動休止したから、本当にギリギリだった。LIDET UWFのあり方に対し最終的な答えを出すための闘いという意味で、あの時のカズさんと今の僕は同じような立場にあるんですよ。

——外敵から奪還するという意味でも。

**渡辺** そういう風景が根底にあるからこそ、こういう大口を叩くことで自分に覚悟を宿らせている部分もあります。自分を鼓舞するじゃないけど、あとに退けなくさせるのも手というか。

——WRESTLE-1チャンピオンシップはカズ選手を最後に実際封印されたわけですが、LIDET UWFは…。

**渡辺** 自分が勝って、ベルトを手にした時に僕がどういう感情になっているかです。それこそ、そこで封印しようと思うかもしれないし、自分が獲ったからにはもっと広げていきたいってなるか。今の時点では僕自身もどうなるかわからないです。

——継続か封印か、その時点にならないとわからないにもかかわらず試合をやるといっても、複雑なシチュエーションです。同じ日に次期挑戦者決定戦もおこなわれるので(伊藤vs井土)、少なくとも初防衛戦はやらなければならないのでは。

**渡辺** そこも複雑ですよ。そもそも中嶋勝彦が封印という言葉を出さなければ、なんの問題もなくその勝者と防衛戦をやれているんですよ。

——あとは、LIDET UWF単体としての興行ではなく、通常の大会の中で継続させる形もあります。

**渡辺** うーん…でも、それだとやっぱりお客さんが見る上で難しいというか。それまでG PROWRESTLINGのルールで見ていたのに、急にLIDET UWFルールが入ると、初めて見るお客さんは入り込みづらいかもじゃないんで。ビッグマッチは別として、

僕はやるとしたらUWFはUWFの枠の中でやった方が伝わると思うんです。

——確かにどういう見せ方がベストなのかは、スタートから今も続いている命題でもあります。

**渡辺** そうなんです。特に僕の場合は二刀流でやってただけに、その難しさを痛感してきました。それでも続けてきたのは、やっぱり闘いを得られるからなんですよ。今のプロレスって昔と比べると闘いの部分が薄れてきているって思われがちじゃないですか。僕はそれをUWFスタイルによって体に刻むことができた。ぶっちゃけ、ファン時代は通ってこなかったですし、あのスタイルに対するあこがれのようなものもまったくなかったんです。

——壮馬選手はハッスルが入り口でしたよね。

**渡辺** 田村潔司を知ったのは、GLEATに入ってからでしたから。

——その田村潔司に教わったんですよ。

**渡辺** だから最初はやらされる意味もわからなかったです。これ、なんのためにやるの?って。練習を見てもらっても、それがどこにつながるのかがまるで見えませんでした。格闘技経験もまるでなかった人間ですから、正直言ったらやりたくないという気持ちもありました。

——そこからやり甲斐を見いだせたのは、どれぐらい経ってからだったんでしょう。

**渡辺** 旗揚げ戦の前に実験マッチがあったじゃないですか、YouTube配信用の。あの時点ではUWFスタイルが嫌で仕方がなかったんですけど、大阪で池本誠知さんとUWFルールでやった(2022年3月13日)あたりから「自分に技術がなければやられる一方だ」ということを実感するようになって、強くならないといけないんだなって気づいたんです。それまでは、通常のプロレスであればある程度相手も受けるから成り立つけど、UWFルールではそんなことは通用しないなって。

——受けているうちに終わりです。

**渡辺** やられてやられて、何も返せないまま終わる。それじゃダメだろとなって、そこから田村さんとの練習も楽しくなってきて、自発的にキックボクシングのジムにも通うようになったんです。

——楽しさを感じられることで変わったんですね。

**渡辺** 今も全然楽しくないわけではないんで。本当に最初だけですよ、嫌だったのは。初めて実験マッチに出た時は、もうU-FILE CAMP(田村のジム)に通っていたんですけど、グローブさえはめたことがない状態で。まだ基礎体力、ウェートの指導だけで技術的なことはまったく教わっていなかったんです。素人とそれほど変わらないレベルの自分がUWFをリアルに経験している長井満也さんとやるという。何もできるわけがないじゃないですか。ハードヒットとの初めての対抗戦でも、関根シュ

レック選手とやって見様見真似でやるしかなくて、とりあえずローキックを出したらまったく効かないんです。それでデッカい腕で放つハンマーパンチが飛んできて、逃げ出したくなりました。伊藤は空手というバックボーンも体もあるからある程度できたんですけど、僕は何も持ち得るものがなかったからただやられるだけで。でも、その時は「何なんだ、これは」だったのが、技術を身につけないことにはというところに気づけてよかったです。

——今だから言えますが、WRESTLE-1時代の姿を見ていただけにまったく違うスタイルをやっているのは、やらされているんだろうなと思っていました。ただ、そのわりにはちゃんと続いているなと感心していたんです。

**渡辺** 続けられたもう一つの理由として、田村さんがやさしかったことですね。もちろん、厳しい時もありましたけど、殴って言うことを聞かせる、無理やりやらせるということはしない方だったんです。今、一つひとつあげられないぐらい本当にたくさんのことを教えていただきました。技術だけでなく、それこそ礼儀作法まで叩き込んでくれたんです。

——へえー、いいお師匠さんだったんですね。

**渡辺** いやいや、師匠と呼べるほど長く教わってはいないですから恐れ多くて言えないですよ。でも、ほんのちょっとかもしれないですけど僕の中に（田村によるものが）入っていると思います。

## LIDET UWFでちゃんと恐怖心を 味わえたのが今思うとよかった

——それ以後は自分なりにトライ&エラーを繰り返してきた感じですか。

**渡辺** そうです。自分で研究して、先ほど言った通り自分なりに行動して、あとは実戦の中で身につけたというよりも刻み込まれたっていう感覚ですかね。このルールは一瞬でも気を抜いたら打撃が飛んできて、それこそ頭や顔面にいいモノが入ったら一発で意識が飛んでしまう場ですから、集中力は養われました。やっぱり、ちゃんと恐怖を味わえたのが今思うとよかったと思うんです。

——恐怖心があるからそれを克服せんとするわけです。

**渡辺** 僕も恐怖心を知っている人間と知らない人間とでは気持ちの持ち方が全然違うと思います。その意味でも光留さんとの試合は大きな意義がありました。

——……怖いですよ、佐藤光留選手。

**渡辺** はい、怖いです。ハードヒットでいったら川村亮さん、あとは和田拓也さんも。そういう人たちとやって、恐怖心を味わったらちょっとやそっとのことでは怖くなら



ないじゃないですか。だから、UWFスタイルを続けてきてよかったって思えるんです。ムダなことなんて1ミリもなかった。

——そこまでかけがえのないものになっていながら、封印することになるかもしれないというも…。

**渡辺** いや、だからこそなんですよ。そういう殺伐感を体験したことが自分にとって大切だからこそ、それがなくなると続けるのは…って思ってしまうんです。でも、それは何も中嶋勝彦のせいだとは思ってなくて。ハードヒットとの対抗戦の時にあった殺伐感を、対抗戦のあとも出せなかったのは自分たちですからね。そこは僕らの責任です。だからこそ、責任ある者としてどう振る舞うか、答えを出す時が来ていると思っています。中嶋選手は、僕とやって防衛したあと、その日のうちに挑戦者決定戦で勝った方とやるって言っているんですよ？それは、あの頃の殺伐感を知らないから言えることですよ。これは大袈裟でなく、僕はUWFルールの試合へ臨むたびに「今日は本

当に殺されるかもしれない]って思いつめながら闘っていました。今はコンプライアンス的に引かかるとは思えないけど「自分が殺されないためには相手を殺すしかない]っていうところまで精神が追いつめられたんです。そんな状況にいたら、一日2試合なんて絶対に言えないですよ。でも、そういうリングにできていなかった僕たち所属選手に責任がある。LIDET UWFを続けるのであれば、自分たちでそのコンセプトを明確に打ち出し、それによって殺伐感をもう一度蘇らせる。所属の人間の中で、LIDET UWFをやる選手が少なくなっているのも現状じゃないですか。それじゃよけいにLIDET UWFと言ったら中嶋勝彦、青木真也ってなっちゃいますよね。そこは渡辺壮馬、伊藤、井土っていう名前が出るようにならないといけないし。

——わかりました。一方、B.G.I.のメンバーとしてやっているG PROWRESTLINGの方の手応えはどうでしょう。

**渡辺** いや本当、自由にやれていますよ。前はG-RIZEとか本隊寄りだったのでビーフェイスじゃないといけないとか、ヒーローになっていかないといけないという立ち位置だったのが、B.G.I.に入って自由にやることでプロレスが楽しいし、自分に合った環境を得られたという思いが強いです。

——自由にもほどがあるとか…リーダーの石田凱士選手がユニットとしての意気込みをマイクでアピールしている最中、後ろで大門寺崇選手とくっちゃべってじゃれ合っていますよね。あれ、目立ちますよ。

**渡辺** あれは大門寺さんが悪いんですよ。何か話しかけてくるんで、僕は「まあまあ」という感じで対応しているだけです。目立ってます？

——現場でも配信でもすこぶる目立っています。

**渡辺** それはまずいですね。

——石田選手にチクったら「自分は放任するけどKAZMAさんが怒るかも」と言っていました。

**渡辺** いや、そのKAZMAさんもよくふざける方ですよ。まあ、それも含めて先ほど言った真逆などところを見てほしいんです。腰を振ってフリーダムに会話しているような人間の、LIDET UWFのリングに上がった時の違いさ加減って言うんですかね。それは僕だけじゃなくみんな出ますよ。G PROWRESTLINGの時とは明らかに違う顔をして、違うメンタルにある。それこそがUWFの面白さであり、僕は楽しさを感じられています。その一方で、1月10日に大阪でG-REXに挑戦して獲れなかったですけど、いつかはもう一度巻かないといけないと思っているし。

——前回は一度も防衛できないまま手放してしまいましたからね。

**渡辺** ヒーローにならなくていいって言いましたが、自由な形のままでGLEATのトップにはならないといけないんで。

——ところで河上“シャーマン”隆一が河上隆一に戻りました。

**渡辺** あれ、ブラスナックルJUNに裏切られたから、記憶が戻ったという体になっているだけなんじゃないですか？

——どうなんでしょう。ただ、今の自分が信用されないのは仕方がないから、これから取り戻していくそうです。

**渡辺** まだ信じられないですね。まずは会場のゴミ拾いから始めないと。そういうのをちゃんと継続すれば、徐々にではありますけど見方も変わるかもしれないですけど…でも、社長のことを爆破していますからね。

——それも直接謝ったそうです。

**渡辺** 謝って許されるものなんですか!?それはすごいですね。それは鈴木社長だからであって、僕だけでなく選手もお客さんもそんなすぐに手の平を返されても「これから一緒に頑張っていこうぜ!」とはならないですよ。

——エル・リングマン選手は一応、後楽園の試合後に受け入れていました。

**渡辺** まあ、B.G.I.の人間としてはこれまでと変わらず闘う立場になるでしょうから。反GLEをやっていたけど、体も常にベストコンディションを作っていたので、ああ見えて我々の見えないところで努力はしているんでしょうね、あの人なりに。そういう意味では、シャーマンだろうがなかろうが油断はしませんけど。

——では、3月8日のタイトルマッチに向けての決意をお願いします。

**渡辺** いやあ、このインタビューでけっこうデカイことをいっぱい言いましたから、もうあとに退けなくなりました。今後、LIDET UWFをどうするかは答えに関しては、そもそも自分が勝たなければ言えないことなので、大前提として中嶋勝彦に勝ちます。そして、その時の僕の口から出る答えを受け止めてください。

——答えは、必ず出しますね？

**渡辺** はい、その場で言います。

